

統語解析についての試論——英語学習者の出会う困難

小川 明

(平成 15 年 10 月 2 日受理)

On Parsing Difficulties in English Learning

OGAWA, Akira

(Received on October 2, 2003)

キーワード：統語解析，文型，主語・動詞，英語学習

Key words：parsing, sentence pattern, subject-verb, english learning

0. この小論では英語学習者の統語解析の問題を扱う。普通統語解析と言えば、今までは、英語のネイティブ・スピーカーが文を解析する時、出会う困難をどのように説明したらよいのかということに焦点が当てられてきた。そのような解析の困難を伴う文を袋小路文 (Garden Path Sentence) という。しかしこの論文では、日本語を母語とする人がどのような時に困難に出会うのかという点からこの問題を考えてみたい。問題に対する接近がたやすいので書かれた文に限ってみたい。そのことによって、英語を習得しようとしている人が複雑な構造を持つ英語の文に出会った時、どのようにすれば、それを乗り越えていくことができるのか、具体的な解決策がわかる。また教えるほうが自覚的にその手助けをすることができる。学習者が出会う困難のなかには、2種類ある。ネイティブ・スピーカーにとっては、まったく問題にならないが、彼らにとっても同様に困難を呈するものである。最初の困難も重要である。どうしてネイティブ・スピーカーには問題にならないのか、日本語との比較の問題が生じる。もちろん英語の学習上の観点からはとても大切な問題となる。さらにこの種の試みが、ネイティブ・スピーカーの統語解析の研究にも貢献することがあるのではないか。ここで提案した統語解析の方法によって今まで問題になってきた袋小路文を説明できる可能性が出てこないだろうか。

1. この考察のために、宮下 (1982) を出発点としたい。これは英語の不得意な学生達の間違ひには共通点があり

それを指摘し、なぜ学生達は「落ちこぼされたか」を論じたものである。

英語を教えていくと、単語の意味を知らないで躓くことも多いのであるが、文の構造がわからず立ち往生することも多いのである。いくつか具体例をあげてみよう。

- (1) a. According to statistics put out by the U.S. Bureau of the Census, the life expectancy for men has increased from 47 years in 1900 to 69.8 years in 1980.
- b. This means you have the capacity to produce sounds that signify certain meanings and to understand or interpret the sounds produced by others.
- c. A house in an urban area is easy to locate in America, because it is numbered and the street it is on has a name.

なぜわからないのか。取りあえず実践的にはどうしたらよいのだろうか。私自身は宮下の説に従って次のように学生に問う。動詞がどこか探さない。動詞を見つけるのには、三単現の-s, 過去を示す-ed, 助動詞が手がかりになると述べる。多分学生は漠然と文を眺めていて、どこに注目すべきか意識していない。動詞がポイントであるという意識はない上に、英語の動詞は見つけにくい。次にその動詞の主語を見つけない。主語は英語では機械的に動詞の前にあります。主語と動詞が複数あったらそのうちのひとつが主節のものです。それはどれですか。このようにしていくとほぼその文の構造を理解してもらうことができるように思われる。

宮下は英語学習で学生が躓く点を4つあげている。

そのうちの1つが今挙げたことである。これは、彼自身が英語が不得意な工学部の学生を教えた実践と、同時に彼の言語観から導き出したものであると思われる。彼の原文を引用する。

英語の文は大抵は主語と述語とから成つてをり、高校以上の読本に出る文の多くは主節と従属節とが立体的に組合はされて、主語と述語との組合せは三つも四つも現れます。そこで学生の最初の関門は第一に主語と述語の組合せを見付けることで、第二に数組の組合せの中から文全体の中心となる(主節の)主語と述語とを選び出すことです。英語では述語は助動詞又は主語に応じて屈折をした定動詞又は過去を表す動詞です。主語と述語とを見付けるには、先ず助動詞か定動詞(一・二人称及び複数の主語に対応した原形動詞、及び三人称単数の主語に対応した-s付きの動詞)又は過去を表す動詞(過去時制の屈折、大抵は-ed付きの動詞)を探して、次にその前にある意味の上で中心となる名詞又は代名詞を探せばよいのです。これらは語の形式に着目して形の上から見当を付けるしかなく、辞書を引いても辞書は何も教へてくれません。次には文全体の主語を決めねばなりません。これは原則として文の先頭に来るのですが、これも中学段階の単純な文ならばまごつかなくても、高校段階以上の複雑な文になると、文の先頭にあってはifやwhenなどに率ゐられた従属節の主語もありますから、これと文全体の主語とを区別せねばなりません。この場合にも文全体の中心となる主語は、その前に他の部分との関係を示す前置詞や所謂接続詞のifやwhenなどは取らないと云ふ形式に着目して、中心部の主語・述語と付属部分の主語・述語とを区別せねばなりません。これも文の形式から推定する他なく、辞書は教へてくれません。

次が彼自身が挙げている例である。これは公刊された宮下には載ってなくてその土台になった彼の未発表の元原稿(1985a)の中にある。

- (2) *What People actually do in relation to groups they dislike is not always directly related to what they think or feel about them.*

主語・述語の組合せが4組ありイタリックで示されて

いる。その傍らに和訳が添えられている。「人々が、嫌がっている集団に関して実際に行ふことは、彼らがその集団に対して考へたり感じたりしてゐることとは必ずしも直接に関りはない。」

2. 実際に教室で使ってみて、この助けはかなり威力がある。そのことをさらに補強する証拠を挙げてみたい。次は受験参考書である杉野・桑原(1991)のはしがきの一部である。

本書は、高校や予備校での永い英語指導の経験を踏まえて、私たちが自信をもって受験生である皆さんにお教えできる解釈の技術100をわかりやすくまとめたものです。英文解釈の技術とは、一見して英単語の無秩序な集合と思える英文のなかに、その主要素を発見し骨格をつかむことです。

大学入試問題の英語長文には、文法参考書の5文型の用例のようなわかりやすい構造の英文は見当たりません。文の主要素(SVOC)はそれぞれ複数の語からなる句や節の形をとっており、さらに接続詞によって文は複雑に入り組みながら幾重にもつながっています。またそれぞれの要素にはいくつもの修飾語句がぶらさがっています。その結果、先に言いましたように、入試英文は英単語の無秩序な集合のように見えるのです。

このような入試英文をいかに攻略するか。私たちが考えたのは、皆さんの持っている文法力を英文の複雑な構文理解にいかすということでした。本書では徹底して文の主要素、とりわけ主語(S) 述語動詞(V)を把握できる技術にこだわっています。SVが発見できれば文の大きな構造をつかんだ事になるからです。SVを中心に、節をおさえて句をおさえて、それぞれ語群相互の把握すること——これが本書における英文解釈の技術の基本です。その上に組み立てられるテクニックの数々については本文をお読みください。

本書では句を()で、従属節を[]で囲み、文の構造を浮かび上がらせる方法をとっていますが、最終的にはそのような書き込みをしないで、眼で文を追いつながり句・節を判別し自動的に構造を把握できるようにしてください。

受験という極めて切実な問題であるから、実践的に役立つ必要がある。そのような本の中で強調されていることを考えるとこれは重要な指摘と思われる。この本は、1991年初版第1刷が発行され1997年に初版第24刷が発行されていることから判断するとかなり読まれていると思われる。たまたま塾で英語を教えていた学生がこの本の存在を教えてくれた。

3. ところでネイティブ・スピーカーはこのようにどれが動詞かわからないことがあるのであろうか。私の知っている範囲では、統語解析においてこれが問題になるようなことはないように思われる。それほどネイティブ・スピーカーにとっては当たり前のことであって問題にならないのではないか。母語として獲得していて自然にできるため問題にならないのではないか。しかし実は英語の統語分析にとっては、隠れた重要性を持つものであると考えることはできないだろうか。あまりにも当たり前のことであるからその重要性が見逃されているのではないだろうか。

ネイティブ・スピーカーにとっては、すでに語については殆ど既知のものである。それに対して学習者にとっては、語が既知のものとまだ習得していないものが混ざっている。とくに習得していなければどれが動詞が見つめることは一層難しい。なぜなのだろうか。日本語では動詞は文の最後に生じて、位置的にはとても簡単である。それに対して英語では途中に生じていてもそれを示す要素が存在しているわけではない。しかし多くの場合、上に述べたように形式的な手がかりを利用することができる。そしてその手がかりというのは数に限りがあり、とても単純で誰にとっても見てすぐ分かるものである。なにしろ未知の単語だらけのところを彼らは読んでいかなければならないのであるから、このことはとても重要である。動詞が分かると主部は位置によって見つけることができる。日本語では、主部は位置も関係するであろうが、基本的には助詞によって示される。英語はもっぱら位置と大抵は名詞句であることによってわかる。

4. それでは動詞を見つけるために障害になることは、何だろうか。第一に主部の長さや構造が関係するようと思われる。主部が短ければわかり易い。たとえば、代名詞のみが主部を形成している文は極めて簡単である。これは次の文 (a) (b) と (c) (d) を比較してみれば明白で

ある。

- (3) a. He considers it more dangerous than any horse he had ever ridden.
- b. He writes catchy tunes with lavish pop hooks and huge slices of melody.
- c. That tough brave little old fellow Wells had had prophetic visions after all.
- d. The main difficulties which are posed concern the rendition of culturally specific German or French terms into English.

この主部の長さの問題は、ネイティブ・スピーカーにとっても関係するのではないかと思われる。なぜなら英語では、主部をできるだけ短くしようという傾向があるからである。例えば、Sを文末に移動する外置化によって主部を短くする。

- (4) a. It had been clear for some time that the demands of the arms control process would increasingly dominate military planning.
- b. It is horrible that he put up with Claire's nagging.

名詞句からの外置化。

- (5) a. A rumour spread through the camp that a relieving force from Dinapur have been cut to pieces on the way Krishnapur.
- b. The time was coming for me to leave Frisco or I would go crazy.
- c. In this chapter a description will be given of the food assistance programs that address the needs of the family.

関係代名詞節からの外置化。

- (6) Toward the close of the Old English period an event occurred which had a greater effect on the English language than any other in the course of its history.

また Biber et al. (1999:623) によれば、実際にコーパスにあたってみると 関係代名詞節は主部にはめったにしか生じない。(Head nouns of relative clauses rarely occur in subject position in the matrix clause (only 10-15% of the time across registers.) その理由は、関係代名詞節は主節を分断して、聞き手や読み手は関係代名詞節を処理してから主節の動詞にたどり着かなければならないからとしている。(…relative

clauses with subject heads disrupt the matrix... hearers/readers must process the relative clause before reaching the main verb of the matrix clause.)

いくつか具体例を挙げてみる。

- (7) a. The opposition Civic Forum, which rejected the communist-dominated cabinet unveiled by Mr Adamec at the weekend, is demanding a more representative government staffed mainly by experts.
b. However, the abstract relationships between Subject and Landmark which it [= of] expresses appear seldom to be even hazily based on any mental image of a spatial relationship.

これは複数の文を同時に処理することが困難であることと関係すると思われる。特に3つ以上の文を解析することが困難であることは、Kimball (1973) の原則 4 (Two Sentences) によって述べられている。それは、「同時に解析可能な文の数の上限は2である (The constituents of no more than two sentences can be parsed at the same time.)」であり、次の (a) は統語解析が困難である。

- (8) a. The boy the girl the man saw kissed slept.
b. The boy the girl kissed slept.

ただし主部の長さだけではないように思われる。構造が関与する。(7)においては、埋め込まれた文が関与している。(9)のように、前置詞句がいくつも連続して長くなってもそれほど動詞を見つけるのは難しくない。

- (9) Repetition of such a verb in the second conjunct with no overt object is ungrammatical in Chinese as well as in English.

5. 動詞が見つかった後、主語を見つけなければならない。一般に動詞の直前が主部の最後になる。これは見つけ易い。しかし主部の先頭を見つけるのは困難を伴うことがある。どのような手がかりがあるのだろうか。その前に主部の先頭を見つけにくくしている要因を考えてみたい。

主部の前にさまざまな要素が存在する。前置詞句、不定詞、従属節などが生じる。それゆえどこから主部が始まるのか見極めなければならない。

- (10) a. In theories of traditional thematic roles and theories assuming a traditional definition of thematic roles, theta roles are determined solely by the verb's lexical semantics....
b. As noted above, verbs may specify details of manner of execution, such as means or intensity.
c. To complete the meaning of some adjectives which are used predicatively, you need to follow with a clause beginning with a 'to'-infinitive.
d. Wherever the second clause contains a verb rather than a proform, the structure is open to more interpretations in principle.

これらは、主部の前にカンマがあるために分かり易い。しかしたとえカンマがあっても、長くなると分りにくくなる。

- (11) a. According to the statistics reported by Hu and Fan (1995), of the 12,404 verb entries contained in Xiandai Hanyu Cidian (The Dictionary of Modern Chinese) compiled by the Chinese Academy of Social Sciences, only 3% are required to take overt objects.

特に分かりにくいのはカンマのない次のような例である。

- (12) a. In the ungrammatical (c)-examples the moved phrase includes the shared material and has an underlying position....
b. At the stage in the derivation the conjuncts can no longer be targeted,

しかし次のように主語が代名詞であるとなるとカンマがなくてもわかり易い。

- (13) a. To taste the full joy of exploration it is not necessary to go to the ends of the earth.
b. At this point one wonders how morphemes come to have syllable structure in the lexicon.

なぜなら exploration it という連鎖は連続しないで exploration と it の間で切れることがすぐ分かるからである。

それでは主部である名詞句の先頭はどのような風に見つければよいのだろうか。一般に名詞句の先頭に来るのはどのような要素なのだろうか。圧倒的に冠詞が手がかりになるように思われる。名詞句の先頭に来る要素は、

冠 詞: a, an, the

指示形容詞: this/these, that/those

所有形容詞: my, his, Fred's

疑問形容詞: what, which

数量形容詞: all, every, each, any, ...; many, much, (a) few, (a) little, ...; two, three,

のいわゆる限定詞である(池内(1985) 参照)。これらの要素があれば、そこから名詞句が始まることがわかる。

- (14) a. the industrially advanced countries
b. a small wooden box that he owned
c. these inexperienced maids
d. London's rush-hour traffic jams
e. many different languages

もちろんこれらの要素がない場合もある。例えば、

- (15) a. funny whistling noises
b. quite pale skin
c. very finely grained alluvial material
d. increased nutritional support

しかしながら名詞句の先頭を掴む手がかりとして、これらの限定詞はとても役に立つマーカーになるであろう。

実は、主部だけではなく動詞の後の統語解析をするに当たっても、名詞句が問題になることが多い。それゆえ名詞句の先頭と末尾がわかることは、とても重要である。

6. もう1つ問題が含まれている。いくつかある主語・述語の組合せのどれが主節のものであるか決定しなければならない。具体的に考えてみよう。従属節を示すものは、従属接続詞と関係代名詞である。これらの後にある主語・述語の組合せは主節のものではない。まず関係代名詞節について観察してみよう。杉野・桑原によって取り上げられている例を挙げてみる。次の文である。

- (16) The person [who uses his camera occasionally to capture a birthday party, scenic view, or a family outing] will snap a few pictures of the cherished moment, eagerly await the outcome, then, often as not, feel disappointed with the results.

次のように読むことを指導している。関係詞が入ると文全体のSVが見えにくくなるから、要注意である。Sはすぐわかる。The personである。whoの勢力範囲を[]でくくると、文全体のVが浮かび上がってくる。問題はwhoで始まる関係代名詞節がどこで終わるのか、を見極めることである。そのコツは、whoという関係詞から離れたVをマークすることである。will snapに注目し、直前の語outingはcaptureの目的語なので直接will snapとは結合しないのでそこで]を閉じる。もうひとつの類似例が挙げられている。

- (17) People [who are not in touch with their intuition] frequently make rash decisions resulting in much regret.

ただし関係代名詞が存在しない関係代名詞節がある。次のような例である。

- (18) a. You're one person I can talk to you.
b. She was the most indefatigable young woman he had ever met.

印象的には関係代名詞節の中の主語は代名詞であることが多い。代名詞の場合はわかり易い。一般的には、NP NPの連鎖はNPとNPを分断すればよい。これは、(13a)にもあてはまる。

関係代名詞節と比べて従属接続詞で始まる従属節は処理が簡単に見える。なぜだろうか。始まる場所は、どちらも関係代名詞と接続詞が存在し、すぐわかる、それに対して終わる場所は、従属節のほうがわかり易い。大抵カンマで示されているからである。また関係代名詞節と異なり、文頭か文尾にあり文の途中にないからである。

- (19) a. Unless the affair is kept secret, the parents find ways of showing their like and dislike as it progresses.
b. Although performance of children's clubs consist mainly of films, other features are introduced such as community singing.

カンマで示されていない場合はやや難しい。

- (20) While she stayed at Binsey many came to seek help and healing from the fugitive saint.

このことは制限用法の関係代名詞節より、非制限用法の関係代名詞節のほうがすぐわかることと似ている。やはりカンマで区切られているからである。(7a)と(7b)と比較すると明らかである。

しかしやるべきことは同じである。動詞を見つけていけばよい。(20)では、stayedの次の動詞はcameであり、その中間にwhile節の末端がくる。at Binsey manyという連鎖はないのでBinseyとmanyの間で切れる。

That節は比較的容易である。文の末尾にあることが多いからである。主部の位置を占めるとき難しい。

(21) That this was a tactical decision quickly became apparent.

以上まとめてみると、従属節の始まりを示す要素(関係代名詞、従属接続詞、that)に注目すること。その後最初に出来来る動詞は従属節の動詞である。その次に出て来る動詞は主節のものである。

7. 宮下の第二の指摘は以下である。

学生の第二の関門は文の透明な枠の把握です。日本語では人や物とその動作、動作とその目的物などの関係を助詞と云ふ語で表しますが、現代英語では、名詞の格屈折が消滅したので、これらの格関係の一定の組み合わせを云はば透明な文の枠として文法化してあります。この枠は、これまでは語順とか文型と称せられて来ましたが、語順自体が格関係を表すのではなくて、透明な文の枠の所定の席に名詞や動詞などが置かれた結果、見掛けの上では語順が格関係を表すかのやうに見えるだけです。語順は格関係を表す透明な文の枠を媒介するだけです。この透明な文の枠は、同様の文法を持つフランス語などを母国語とする人にとっては、極く自然に理解でき身に付け易いのですが、個々の格関係を個々の助詞と云ふ語で表す日本語を母国語とする私達日本人には、分りにくく身に付けにくいのです。何しろ目に見えない透明な枠が見えるようにならねばならないのですから。しかもこの透明な枠は同じ文の中で数種類を組み合わせる用ゐられるのが普通ですから。

彼が文型と言う時に何を指しているのだろうか。この問題に取り掛かるには、彼の言語観を見る必要がある(彼の英語学者としての特異な存在については、小川(1990)を参照して下さい)。宮下は、英語の特徴を次のように述べる。言語は形式に基づいて3つに分類できる。文法上の関係を示すのに、孤立語は、単語の形式が変化しないで、主として語の位置で表す。屈折語は語の形式

を変え(屈折)、膠着語は文法上の関係を示す短い語を他の語につける。それぞれ代表的言語は、孤立語が中国語、屈折語がフランス語・ドイツ語・英語・ロシア語、膠着語が日本語である。しかし現代英語では屈折は、人称代名詞や動詞に限られ、孤立語と膠着語の性質を大幅に身に付けている。英語は主格・対格・属格・与格の4つの格を持っていたが、格屈折は現在人称代名詞には残っているものの、名詞と形容詞は屈折を持たない。属格を表す'sや複数を表す-sは膠着語的な接尾語に転化している。格屈折がなくても関係を表す必要があるから、格屈折に代わる表現法が発達することになる。それが現代英語の前置詞や接続詞や文型である。

彼によれば文型とは、主格や対格や与格の数種類の一般的な組合せを云わばセットとして、目に見えない文の枠となっているものをいう。そして語を文型の枠に嵌めて表現する。

それでは彼は具体的には文型をどのように考えているのだろうか。第一番目の蹟く点と異なり、未発表の原稿の中にも具体的な英文の例は挙がっていない。しかし彼が具体的にイメージしていることは、次から分かる(宮下(1985b: 48-9))。

文型は、要するに、名詞の主格・与格・対格の屈折の消失を補ふ文法ですから、その種類は

- ① 主格+述部 (be, 自動詞, 他動詞を含む)
- ② 主格+他動詞+対格
- ③ 主格+他動詞+与格+対格

以上の三種類でせう。…これを授業ではどう具体化するべきか。零記号をどう教へるかが鍵でせう。beが表現化した文を文型の一つとして独立させたのは零記号を擱めないからでせう。五文型説は改作の要があります。

しかしこれだけでは、不十分だと思われる。これだけでは、具体的に教室で教えるときの実践には繋がってはいかない。これは非常に実践的である第一の処方と異なる点である。このことが具体例を挙げなかった理由なのではなからうか。

8. それでは文型というものをもう少し眺めてみよう。英語を習得していく上で文型が大事であるという指摘は他の人によってもなされている。例えば次の対談で、英

語を書く時、文型が大切であることを強調している（柴田・藤井（1985: 174-175））。

藤井 …実は文型の知識が大切なのではなくて、あの文型を支配しているのは動詞だ、という点が大切ですね。英語の動詞にはその動詞の支配する固有の文型がある、ということをよく覚える。ある動詞を選んだときに、その動詞が支配する文章の型は書き手の勝手に変えられるわけではなく、きちっと決まっている、ということをよく承知しておくことが大切です。もとの日本語の文がどんな格好であろうとも、それを英文にするとときに、その中心となる動詞を選べば、あとはその動詞の命ずるままに英語の文の文型を作っていかなければならない。それが一番大切なところではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

柴田 そうです。一般に、動詞にたいする認識は甘いですね。動詞では、英和辞典を引くときでも、まず文型を見なければいけないくらいですが、……

また佐伯（1992）では、次のようなことが述べられている。

文の構造について細かく言えば、この他にも構造は色々あるが、その多くは、これら5つの基本的な構造のバリエーションで、前述の形容詞補語や名詞補語や状況補語などがアクセサリーとしてついたものである。したがって、文章がたとえ複雑に見えても、品詞と機能をチェックする分析をやってみると、その文の構造の骨組みは、これら5つのうちのどれかである可能性が高い。
………

文の構造というのは、○や△や□が切り抜かれたカードのようなもので、それらの穴にぴったりと合う品詞と機能を考えて、言葉を選び、それらの単語をカードの穴に埋めていけば、文法的に正しい文が自然と出来上がるのである。つまり非常に簡単なジグソー・パズルのようなものだ。……

9. 文型という言葉で指すものは少しずつ異なっている。まずいわゆる5文型とはどういうものなのだろうか。整理してみると、

- i. 動詞によって文型が決まる。
- ii. 文型の種類は5つである。
- iii. 動詞には、必ず伴わなければならない要素がありその数は決まっている。動詞の前には必ず1つ、その後ろには、最大2つ生じる。それが文型の土台になる。
- iv. 要素の占める位置によって文法関係が決まる。
 - a. 動詞の前の要素は、主語になる。
 - b. 動詞の後に一つの要素が生じる場合は、それは目的語か補語。どちらになるかは動詞が決める。
 - c. 動詞の後に二つ要素が生じる場合は、間接目的語+直接目的語か目的語+補語。
- v. 要素の統語範疇は主語、目的語、補語によって決まる。典型的には、主語か目的語であれば名詞、補語であれば名詞か形容詞になる。

これが基本であるが、実際の英語の文に当たっていくと5文型ですべて片付くわけではない。そこで拡張、修正のさまざまな提案がなされているのである。しかしながら英語の持つ基本的な性質は見事に捉えられている。動詞によって枠が決まり、かならず要素で埋めなければならないこと、順序によって文法関係が決まること、つまり英語は文構成において枠と語順がとても重要な言語である。

これは日本語の持つ基本的な性格と比べると一層はつきりする。まず日本語は場面に依存して比較的自由に省略ができる言語である。主語でも目的語でも省略できる。第二に語順にはあまり依存しない言語である。

それでは、どのみち必要な文法関係は何によって示されるのだろうか。これは助詞によって表される。この英語と日本語の文の構成の仕方がまったく異なることが日本語を母語とする人にとって障害になっていることが宮下によって指摘されているのである。

ただ動詞によって文構成が決定される点は、英語とまったく同じである。仁田（2002:28-29）によれば、「動詞には、自らの表す動作や動きを実現・完成するために、必要とする名詞の数や種類や意味的なタイプが、基本的に決まっている。…動詞「読む」は、読むという動作を実現するために、動作の仕手という意味を担う名詞と動作の対象という意味を担う名詞の二つを最低限必要とする。仕手を意味する名詞は通常「名詞+ガ」で表示され、対象を表す名詞は「名詞+ヲ」で表示される。また読むという動作の仕手を表す名詞は主に〈人間〉という意味

特徴を持つ名詞であり…対象になる名詞は、「書物」「表情」「世界の動向」等々で、読まれる内容のあるものでもラベルを貼れそうな名詞である。」

5文型の基本は文法関係である。統語範疇は二次的なものである。典型的には名詞句と形容詞句がS, O, Cを埋めていくことになる。それだけでは、言語事実を説明できないので、統語範疇の種類を増やしていくという修正が試みられているのである。例えば, Quirk et al. (1985) では、次の文を以下のように分解する。

- (22) a. They like [the children to visit them].
SVO
b. They supposed [the children] [to be guilty].
SVOC
c. They asked [the children] [to bring some food]. SVOO

名詞句だけではなく不定詞もOやCの役割をはたすことができる。

一方統語範疇を土台に文型を考えたのがHornby (1956) である。彼は動詞型と称する。ただし目的語のような文法関係もところどころ用いている。いくつか動詞型をあげてみる。

- VP1 Verb+Direct Object I know your name.
VP3 Verb+(Pro) noun+(not+) to-infinitive
The officer ordered his men to advance.
VP9 Verb+(Pro) noun+Past Participle
He made his influence felt.
VP12 Verb+(Pro) noun+that-clause
They told me that I was too early.
VP15 Verb+Conjunctive+clause
I wonder why he hasn't come.
VP19 Verb+I.O.+D.O
Please pass me the salt.
VP22 Verb (be)+Subject Complement
This is a book.

この動詞型についても改良の余地はありそうである。たとえば、佐藤 (1969) は、次の3つの文をHornbyは、それぞれ別の動詞型に属させているが、すべてSVOOであると見なす。

- (23) a. Ask [him] [his name].
b. Ask [him] [how to pronounce the word].
c. Ask [him] [what his name is].

10. 実際統語解析をする時は、Hornby式の文型が土台になると思われる。統語解析において与えられるのは、語の連鎖であるからである。そこから切れ目を見つけなければならない。具体的な例でやってみよう。

- (24) a. The surgeon had already informed [Mr and Mrs Reynolds] of [the possibility that an abdomino-perineal resection of rectum may be required].
b. A study at the Kings Country North Rehabilitation Facility, a jail near Seattle, asked [prisoners serving time for nonviolent drug- or alcohol-related crimes] [to sit through Vipassana meditation for 10 days,...].
c. Transcendental Meditation reminds [you] [that it's how you feel that's important].
d. It reminds [those of us who live in the concrete jungle of Manhattan] of [the passing of the seasons] and allows us to enjoy watching [animals such as squirrels and birds] [cavorting about].

分析ができるためには、informがNP+of NPの型を取ることが分かっている必要がある。最初のNPは「相手」を示し、後のNPは「伝える事」を示す。同様にaskはNP+to-infinitive, remindはNP+that節ないしはNP+of NPを取ることを知らなければならない。またwatchは、NP+ Vingを伴うことを知っている必要がある。

次はO+OとO+Cの例。これも動詞の後に2つの要素があることが、まず分からなければならない。どこで切れるか分かる必要がある。

- (25) a. What gives [the hundreds of rocks and minerals] [the properties that make [them] [so useful and beautiful]]?
b. Perhaps it is us who made [them] [what they are]?

(24)–(25) のような2つの要素をとる動詞の場合と異なり、動詞の後に1つだけ要素をとる場合は簡単である。

- (26) a. Information from the planetary probe indicates [that all the terrestrial planets have undergone differentiation].

- b. Moscow continues [to value the Warsaw Pact as a military buffer.]

一つの動詞は必ずしも1つの動詞型ではなく複数の動詞型を持つことがある。例えば, persuade は, 少なくとも次の形式を取る (cf. 奥野 (1989)).

- (27) a. I persuaded John to be honest.
b. I persuaded John that he should be honest.
c. I persuaded John of the fact that I was honest.

(28) は, ネイティブ・スピーカーにとっても袋小路文である。これは, ひとつの動詞が複数の動詞型を持っていることが原因になっていると考えられる。

- (28) a. The doctor told patients he was having trouble with to leave.
tell+NP+that-clause
tell+NP+to-infinitive
b. The doctor expected the patient that he was having trouble with to leave.
expected+that-clause
expected+NP+to-infinitive
c. The soldier persuaded the radical student that he was fighting in the war for to enlist.
persuade+NP+that-clause
persuade+NP+to-infinitive
d. I warned the ugly man would attack.
warn+NP+that-clause
warn+that-clause

統語解析において, このような個々の述語の語彙特性を利用する必要があることが, Ford et al. (1982) で主張されている。

文型については, もう少し検討する必要がある。統語形式と名詞句が持つ意味 (例えば「相手」) と主語・目的語・補語のような文法関係の三者をどのように統一したらよいのか。これらは, 生成文法でいう下位範疇化枠や意味役割とどのような関係なのか。また学習辞書で用いられている文型の表記は十分なのか。これらについては, 機会を捉えて検討をしてみたい。

11. 最後に次のようなタイプの困難について考察してみよう (なお第3の困難については, 代名詞に関わるもので統語解析とはやや異なるので本稿では扱わない)。

学生の第四の関門は名詞に後続する分詞です。英語では, 現在分詞や過去分詞に率ゐられた句が名詞に後続して, 名詞が表す事物の複雑なあり方などを説明することが頻繁に行はれます。特に動詞の原形に-edが付いた形の過去分詞は, 動詞の過去形と形が全く同じなので述語と紛はしく, 学生達を悩ませます。これを過去を表す動詞と取るとその前の名詞は主語と云ふことになってしまひ, 主語・述語の関係が狂ってしまひます。ですから-ed形の動詞が出て来たら, それが (1) 過去を表す述語動詞であるのか, (2) 助動詞beに伴って受身を表し述部を成すのか, (3) 助動詞haveに伴って完了を表し述部を成すのか, それとも (4) 直前の名詞の対象の受身又は完了を表すのか, 又は (5) 受身又は完了の結果の状態ないし性質を表すのかを, 学生達に繰返し確めさせなければなりません。

名詞を後ろから修飾する分詞に学生達が躓くのは, 日本語の文と英語の文との展開の仕方の違ひを充分に意識してゐないせりでもあります。英語の文では, 日本語と逆に, 先に結論を述べて, 後に必要に応じて説明をベタベタとくっ付けます。所謂関係代名詞も <it.....that.....> 構文も <it.....to.....> 構文もこの展開の仕方に従つてゐます。日本語と英語の基本的な違ひを充分に分らせた上で英語の個々の知識を教へ込むことが大切だと思ひます。

その具体例として次を挙げている。

- (29) The word *prejudice*, derived from Latin noun *praejudicium*, has, like most words, undergone a change of meaning since classical times.

derived を過去形と取るか, 過去分詞と取るかの問題である。これを過去の動詞と取るとその前の名詞は主語ということになり, 主語と述語の関係が狂ってしまうことになる。

この問題はネイティブ・スピーカーの統語解析においてもよく取り上げられる。このタイプは袋小路文の典型例である。英語学習者にとってだけではなく, ネイティブ・スピーカーにとっても困難を呈するのである。

- (30) a. The horse raced past the barn fell.
b. The boat floated on the water sank.
c. The dealer sold forgeries complained.

しかしながら、よく考えてみると、これは第一の困難と密接に関係する。主語と述語を見つけよという問題に還元される。過去分詞を過去形の動詞と誤って取るために出てくる問題である。第一の関門の下位範疇になる。このことは、宮下の言う第一の関門は一見ネイティブ・スピーカーに関係していないように見えるが、実は見えないところで深く関係していることを示す。彼らには、容易くできるためその重要性が見過ごされているのだと思う。

もう一つの問題が提示されている。語順の問題である。これが日本語を母語とする学習者にとってとても障害になり、それをどのように学習者が処理すべきかが塩田(2001)で分析されている。この問題は非常に重要であり私自身も機会を捉えて考察してみたい。

12. 以上学習者にとっての統語解析の困難を宮下を土台に考えてみた。残った問題は多数あるのでさらに追求してみたい。特にネイティブ・スピーカーの統語解析の問題に寄与できる部分があるのかどうか、機会を捉えて調べてみたい。

* 例文の出典に関してはいちいち述べなかったが参考文献、特に Biber et al. (1999) やその他の言語学・英語学の本や論文およびTimeなどから利用させて頂いた。感謝致します。

参考文献

- Biber D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.
- Ford, M., J. Bresnan, and R. M. Kaplan (1982) "A Competence-based Theory of Syntactic Closure," *The Mental Representation of Grammatical Relations*, ed. by J. W. Bresnan, 727-96.
- Hornby, A. S. (1956) *A Guide to Patterns and Usage in English*, 研究社.
- 池内正幸 (1985) 『名詞句の限定表現』新英文法選書第6巻, 大修館.
- Kimball, John (1973) "Seven Principles of Surface Structure Parsing in Natural Language," *Cognition* 2 (1), 15-47.
- 宮下真二 (1982) 「学生達はどこで落ちこぼされたか」『翻訳の世界』1月号. 宮下 (1985b) に所収.
- 宮下真二 (1985a) 「学生達は英語のどこで落ちこぼされたか」宮下 (1982) の元原稿. 宮下 (1985b) に所収.
- 宮下真二 (1985b) 『英語はどういう言語か』季節社.
- 仁田義雄 (2002) 『辞書には書かれていないことばの話』岩波書店.
- 小川 明 (1990) 「宮下真二 小論——ある英語学研究者の軌跡」『東京家政大学研究紀要』第30集(1), 95-100.
- 小川 明 (1995) 「五文型について」『東京家政大学研究紀要』第35集(1), 257-66.
- 大津由紀雄 (1989) 「心理言語学」『英語学の関連分野』英語学体系第6巻, 大修館.
- 大津由紀雄 (2003) 「言語心理学 16-17 文理解 (1)-(2)」『英語教育』7-8月号.
- 奥野忠徳 (1989) 『変形文法による英語の分析』現代の英語学シリーズ第9巻, 開拓社.
- Pritchett, Bradley L. (1992) *Grammatical Competence and Parsing Performance*, The University Chicago Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- 佐伯智義 (1992) 『科学的な外国語学習法』講談社.
- 佐藤暢雄 (1969) 「VERB PATTERNS の一試案」『英語学』1, 118-29, 開拓社.
- 塩田久美子 (2001) 「日英語の語順比較と第二言語習得」東京家政大学修士論文.
- 柴田徹士・藤井治彦 (1985) 『英語再入門 読む・書く・聞く・話す』南雲堂.
- 杉野隆・桑原信淑 (1991) 『英文解釈の技術100』桐原書店.

Abstract

The aim of this paper is to investigate into parsing difficulties that English learners encounter in reading. Considering the fundamental differences in sentence structure between the Japanese and English languages, Miyashita (1982) provides four strategies for overcoming the obstacles. This paper focuses on three of them and measures the effectiveness. It has been proved that these three strategies work successfully, though some modifications are necessary. In these strategies the verb plays an important role. Then it is essential to identify the verb in the sentence. Each verb has its own pattern (s). Unless English learners are not familiar with these sentence patterns, they cannot read easily. When they learn the meanings of a verb, they should also learn its sentence pattern (s), as in stated in Hornby (1956). It is hoped that this paper will contribute toward explaining the difficulties experienced by native speakers of English when they encounter “garden path sentences.”